

戦後の生活再建も、生易しいことではなかった。主人は出版業に従事することを考えていたが、野崎産業株式会社に関係し、そこで全智全能を發揮して働き、昭和五十八年十二月に、その波乱な人生に終止符をうった。

私の人生の前半も波乱に富んでいたが、後半になって、やっと平和のありがたさをしみじみと味わえるようになった。

追憶！ 開拓の花嫁から避難行へ

栃木県 星 初 枝

私は、当年八十八歳になります。目も足も不自由なうえ記憶も定かではありませんが、何とか元気なうちに渡満前後の経緯を書き残しておきたいと思っています。

私は、栃木県出身の星長男のもとに嫁ぎましたが、星長男は国策に従って、第一次武装移民とし

て満州国の弥栄村イサカムラに入植していました。

昭和十（一九三五）年ころは不景気のどん底で、農村では肥料を買う金もなく、田畑を売って生活費にする農家もあるような時代でした。私は、八人の兄弟、姉妹の長女でした。年ごろになったあるときに、私にはもつたないような資産家からの縁談がありました。家の事情を考えると、とても応じられない気持ちでした。

そんなとき、近くに住んでいる従姉妹が訪ねて来て、「満州へお嫁に行かないか？ 旅費はお国から八十円出るし、所帯道具は何も要らない」という話をして下さり、すぐに、「ああ、これだ！」と思いました。早速、従姉妹と一緒に申請書を書いて、親の実印を無断で押して、宇都宮の軍司令部に郵送してしまいました。書類が届いたのでしよう。お巡りさんが身元調査に来たので、両親は何事かとびつくりしましたが、私の説明でようやく事情が分かり、お巡りさんの前で厳しくしかられてしまいました。

そこへ資産家との縁談の仲人役の人が、烏山の町議会議員を連れて訪ねて来ました。先に従姉妹の所へ行って、従姉妹から私が満州へ行く話を聞いたため、「一体どういう気だ！」と言ってきた。私の親たちは、「家は貧乏で何の支度もできない。かといって、遙か遠い満州などに嫁にはやれない」との一点張りでしたが、私も「内地でお嫁には行かない」と言い張っておりました。

父も仲人さんも、最後には私の気持ちを汲んでくれたでしょう。「そんなに満州に行きたいのなら良いだろう。親戚で外国に行っている人もいるし、お前が行く弥栄村には親園村の村長さんの弟の越井さんも行っている」と許してくれました。そして、夜の十一時ごろになって、決め酒となりました。そこで母も仕方なく決め酒の用意をして許してくれました。

誰にも知られないように、満州に渡ろうと思っていましたのに、地元の新聞に、「大田原高等学校出の満州花嫁、決まる」という大見出しが出

て、大変な話になり、「新聞を見て飛んで来た」と、学生時代の親友が、「満州へ行ったら死ななきゃ帰って来られないんだよ！」と言いました。私は友人に「大丈夫よ。四、五年過ぎたら、私が写真で選んだ人を連れて帰って来るから、そのときを楽しみにしていてね」と言って、別れました。

叔父や叔母も、新聞を見たといって飛んで来て、「お前は親不孝だなあ。私たちの近所に嫁に行けば、たんすなどは、みんな買ってあげたのに」とも言われました。他の人たちは、涙、涙で私も対応に困ってしまいました。「おめでとう！」と祝ってくれたのは、仲人さんだけでした。

満州への出発は一週間後でしたので、忙しい日々が続きました。父は、私が持つて行く物の買い出しをしてくれ、従姉妹は宇都宮の高等女学校の裁縫部を出ていて裁縫が得意でしたから、私が持つて行く着物の仕立てなどを、泊まり込んで夜遅くまで手伝ってくれて、大変助かりました。

持参する物は、布団袋と茶箱と柳行李やなぎしりでした。鏡は割れないように、布団にくるんで布団袋に入れました。濡れて困る物は茶箱に入れました。満州では雨が降ると道がぬかるむから、もんぺと長靴がないと歩けないと仲人に教えられ、母が涙ながらに作ってくれたもんぺ二枚を柳行李にしまいました。これで準備が完了しました。

昭和十年四月三十日、いよいよ新郎抜き結婚式の日がまいりました。朝早く起きて、バスで太田原市の美容院に行きました。朝方は良い天気でしたのに、急に雨が降ってきました。しかし、美容院での着付けなど万端終わったころには、にわか雨もあがり澄んだ青空が戻っていて、ほっとしました。家に帰りましたら、村議会の議員さんをはじめ、親戚や組内の人々が見えていました。結婚式も、にぎやかになってきたなと思つたら、もうお別れの時間になってしまいました。万歳万歳の声に送られて、車で烏山に向かいました。

夕方、山の坂道を走っていると、たくさんのカ

ラスが巢に帰るのでしようか、大きな声で鳴きながら飛んでいました。

主人側の式場に着きました。もちろん、ここにも主人はおりません。しかし私の方と同じように、町会議員さんをはじめ、親戚、組内の方々、そのうえ芸者さんが二人も呼ばれていて、とてもにぎやかでした。夜も更けて、式場はやっと静かになってきました。

翌朝、遅い食事を済ませたとき、実家から弟が、叔母たちに頼まれたとのことで、小さな包みを届けに来ました。そして、「一日も早く義兄さんを連れて来て、親たちを安心させるように」と言つて帰りました。

五月三日、栃木県から一緒に満州に行く斉藤さん、谷田貝さんのご夫妻と私、大田原市の荒井さんご夫妻、早乙女さんの母子、それに満州の千振チブ村ムラに戻られる川上さんご夫妻と二人の弟さん、そして現地視察に行かれる親園村村長の越井さんなど総勢十五人は、宇都宮市の二荒山神社の神主さ

んにお祓いをして頂いて、列車で一路福井県敦賀港に向かいました。敦賀港に着いてみると、なれない魚介類のにおいが鼻について、故郷の山野は良いなと懐かしく思い、乗船しました。

船に乗って、銘々に渡されたテープを岸に投げました。やがて銅鑼が鳴り船が静かに岸を離れ、切れたテープが波間に漂うのを見ると、さすがの私もあふれる涙で何も見えなくなってしまうました。

大海原を越え、現在の北朝鮮の清津港へ上陸しました。清津駅の駅長さんは下都賀郡の出身で、仲人の谷田貝さんと同郷、助役さんは私の生まれ故郷の人でした。私たち三人に、大きなお皿にいっぱい盛られたお寿司を「どうぞたくさん食べて下さい」と出してくれました。これが最後の寿司になるかもしれないと思い、ご厚意に甘えて、お腹いっぱい頂きました。

駅長さんたちに別れを告げ、列車に乗ってハルビンに向かいました。ハルビンからは船に乗り換

えましたが、途端にアヘン、たばこ、体臭などが混じって何ともいえない、嫌なにおいがこもっていました。途中で、千振村の人たちが船を降りるので、「お達者で」と、お互いに別れの挨拶を交わしましたが、寂しい気持ちになりました。

船はやがて佳木斯チヤムスに着き、私たちは歩いて佳木斯の弥栄出張所に行きました。出張所で各自の住まう場所が決められました。家では一日三食お腹いっぱい食べていましたが、ここでは二食しか食べられず、街で中国人が売っているのは脂っこい物ばかりで、私の口に合いそうな物はありませんでした。

毎日雨が降り続いていて、現地に行くこともできずに佳木斯で足止めされ、半月経ちました。やつとやんだので、三頭立ての馬車に乗って現地に向かいましたが、雨でぬかるんでいる悪路では、みんなが乗って行くのは馬がかわいそうだと思います。馬車から下りて歩きました。

夜遅くなつて横道河子に着き、ここで宿をとる

ことになりました。宿は温突^{オシドン}部屋で暖かいので、一度に疲れが出て、着物のままで横になったように覚えていきます。

夜中に首のあたりがムズムズするので手で触ってみると、ごろごろする物があり、慌ててつまみ、つぶしてみるとパチンと音がしました。紛れもなく虱のつぶれる音でした。それからは、しばらく寝付けませんでした。疲れていたのていつの間にか朝までぐっすり寝てしまいました。

朝食を済ませ、再び馬車に乗りました。午後、小銃を背負い双眼鏡を持って白馬に乗った主人が、私たちを迎えに来てくれました。「ご苦労さん」と、私たちに向かって声を掛けたとき、何に驚いたのか、主人の馬が急に暴れ出して棒立ちになり、主人が振り落とされました。足が鎧から外れず、しばらく宙吊りになりましたが、幸い怪我もなく何よりでした。

開拓地が近くなり、国道を離れ脇道に入りました。道はぬかるんでいましたが、五月末のこと

で、いろいろな草花が咲き競っていて、こんな素晴らしいお花畑があらうとは思いませんでした。途中で雷鳴とともに激しい夕立に遭いましたが、すぐやみ、主人の案内でそれぞれ自分の家に落ち着きました。ひと休みしてから夕食となり、組合長さんをはじめ、近所の方が三夫婦の結婚の祝宴をしてくれました。三日ほどしてから、今度は山崎団長さんほか大勢の方々が弥栄神社で、今回渡満した人たちの結婚式を挙げて祝って下さいました。

開拓団に来て二年目、鉄道が敷設されて、汽車が家の近くを通るようになりました。駅も家から一里ほどの所にできましたので、便利になりました。このころになると、土地の習慣にも慣れて、日常生活も落ち着いてきました。土地は広いし豊かでした。

中国人と朝鮮人の四家族から畑や水田を耕作させてほしいと申し出がありましたので、中国の人には畑を、朝鮮の方には水田の耕作を頼みまし

た。この人たちの家は、それぞれ田畑のそばに
作って住んでもらいました。田畑の収穫物は折半
と取り決めましたが、米は種のを差し引いても
十分過ぎるくらい収穫がありました。自家用のお
米は、必要なときに精米して持って来てもらう
うに話し合っていました。

そのうちに乳牛を飼い始めて、乳搾りは主人が
しました。自家用以外の余分な牛乳は街の加工工
場に持って行き、買い取ってもらいました。たま
には出来上がったバターをもらってきて、さいの
目に切り醬油をつけて酒の肴にして、おいしく頂
きました。

しばらくして豚も飼うようになりました。飼料
は私どもが購入して、飼育するのは中国人にお
願いました。毎年暮れには処分して、肉は折半
し、血や皮は中国人にとり取り決めをしました
から、私どもは手いらずで、おいしい豚肉を食べ
ることができました。深い井戸から水を汲むの
も、太い薪を割るのも、たばこ一箱をあげれば快

くやってくれますので、こんな楽な生活は内地の
お嫁さんでは味わえないことだと思いました。

お茶も日本茶ではなくコーヒー、紅茶に角砂
糖。お茶請けも内地では、そのときどきの漬物が
ほとんどですが、パイナップル、ビスケット、ドロップ
などでした。お友達に小豆など差し上げるとき
も、一斗単位でしたし、広い畑で肥料も要らずに
できるスイカは、甘く大きなものでした。カボ
チャもたくさんとれました。温突用のかまどの火
を落として、残りの灰の中にカボチャを丸ごと入
れて三十分も経つと、まるで栗のようなおいしさ
でした。冬には自家製のアイスクリームを作って
食べました。

主人は冬季、中国人を連れて二里ほど山に入っ
て、樹を切り薪を作りました。その大部分は木炭
にして、近くの金鉱に出荷しました。そのうえ中
国人は金鉱で働き、主人は銃を持って、金鉱を荒
らしに来る匪賊の監視をしました。代金は折半で
したが、ひと冬に当時のお金で千円ほどになりま

した。

昭和十三年一月には次男の不死雄が生まれ、五カ月目に一家四人で帰郷しました。私の両親をはじめ家族に大歓迎され、親戚にも招待されるなど、忙しく楽しい日々を過ごしました。

あつという間に一カ月が過ぎて、満州に帰ることになりましたが、新潟港から出る船が満員で乗船できず、やむなく次の便を予約して実家に戻りました。両親や兄弟は、意外な成り行きに大喜びして迎えてくれました。

私たちは予約した船で満州に帰りましたが、途中、新京（長春）、奉天（瀋陽）を見物しました。入れ替わりに、主人の両親に一カ月の日程で内地の旅行をして頂きまして、両親も大いに楽しんできたようでした。

月日が経ち、子供たちも大きくなり、相変わらず豊かな暮らしを続けていましたが、各所へ召集令状がくるようになってきました。四十歳を超える人も召集されるようになり、昭和二十年七月二

十五日、四十二歳の主人にも、とうとう令状がきて、七月二十八日入隊せよということになりました。年老いた両親と、国民学校四年生を頭に男の子四人の生活が皆私の肩に掛かってくると思うと、しつかりしなければと身の引き締まる思いがしました。二十六日には、「両親と子供たちを頼む」と言い残して、主人は出発しました。残された主人の両親は、主人の弟二人を主人より先に兵隊に出していましたので、他に頼る所もなく、孫たちを抱えた嫁の世話になるのは心細かっただろうと、気の毒に思いました。しかし、主人がいなくなっても、中国人はよく働いてくれましたので、ひと安心でした。

そんな状況になったある日の真夜中に、太田さんから「一週間ほど避難するから、食糧持参で孟家崗駅^{ジャカン}へ集合するように」という連絡がありました。次の連絡先の岡田さん宅は遠いので、家で働いていた中国人の一人に連絡を頼み、他の使用人に家族七人が乗る馬車一台と荷物を運ぶための馬

車一台、計二台を借りてもらいました。中国人は鍋いっぱいのご飯や、保存が利くからとカリントウや茹でた卵を持って来てくれました。また、お金を借りたままなので、今家にあるだけ持って来ましたという中国人もいて、何と律儀な人たちだろうと涙が出る思いでした。弥栄村の人たちのなかにも、お金を貸した人がいたらしいのに、お金を返しに来た中国人は少なかったようです。これも、主人が中国の人たちと良い関係で付き合っていたからだ、有り難く思いました。

いよいよ出発するときには、中国人がみんなで見送ってくれ、「家は鍵を掛けておくから早く帰って来て下さい」と言ってくれました。私は「もし帰ってこれなかつたら、家に残してある品物は、みんなで仲良く分けて下さい」と答えて出発しました。

孟家崗駅に着いたものの、汽車が来たのは夜になってからでした。私たちが乗るのは無蓋車でした。子供は自分では乗れないので、おぶい紐を繫

いで引つ張り上げました。貨車はもういっぱいになっていましたが、気が付いたら、私の子供が一人も乗っていませんでした。私は子供が乗れないのなら引き揚げるのをやめると言って、やっと詰め合わせて乗せてもらいました。

汽車は雨が降る暗闇の中を走り出し、やがて佳木斯駅に着きましたが、佳木斯の街は火の海でした。日本兵が駅のホームから、たくさんの慰問袋を私たちにくれました。私たちが持参した食べ物は腐ったりして、残り少なくなっていましたので、袋に入っていた乾パン、コンペイ糖などは貴重な食べ物でした。佳木斯市街の燃え上がる火を見ながら、雨の降る暗闇の中を汽車は進んでいきました。雨をしのぐのに、一枚しかない毛布を使いましたが、両親と子供たちを覆うのにやっとで、私はずぶ濡れでした。おまけに他の部落の老人が差している傘の雫が、私の首から背中流れ込んできましたが、怒る訳にもいかず、我慢するしかありませんでした。八月というのに、主人の

綿入れの洋服上下を着ていても、濡れた体は冷え込み、寒くて仕方がありませんでした。

雨はやみましたが、寒さと急激な環境の変化から、大勢の病人が出ました。なかには、頭のおかしくなった人がいて、用便後にお尻をふくこともできず、私がかわりに始末をしてあげましたが、かわいそうでした。もっと気の毒だったのは、谷田貝さんの一人娘さんが亡くなり、腐臭がひどくなったので、やむを得ず松花江シヨカコウに投げ込んだことでした。娘さんがくるくる回りながら川に落ちていく姿を、五十年経った今でも、ときどきはっと思い出すことがあります。

汽車が駅に停まり、脇に流れていた川で大急ぎでオムツの洗濯をしました。有り難いことに、雨があたり日が差してきて、オムツがすぐに乾いたので助かりました。汽車は緩化の駅で停まってしまいました。下車して、駅の近くの日本人宅に立ち寄って聞いたなら、「残念なことに戦争は負けだよ」とのことでした。「塩がある。持って行きな

さい」と鍋に入れて下さいました。おまけに街の方々が炊き出しをして下さり、真っ白い米のおにぎりを頂きましたが、そのおいしさは格別でした。

私たちは荷物を背負って、避難場所の飛行場まで歩くことになりました。義父は「戦争に負けたい」と聞いた途端に腰が抜けたのか、背負っていたリュックサックも持てず、義母に手を引かれて、よちよち歩きになってしまいました。義父の落胆ぶりを見た私たちは、「今まで勝つと信じて働いてきたのだから無理もない」と思いました。

長男の照男はリュックサックの大きい方を、次男の不死雄は小さなリュックサックを、三男の義郎も小さな荷物をそれぞれ持ち、私は母の柳行李を背負い、その上に末っ子の四男也を乗せて、八キロメートル先の飛行場まで歩きました。大きな口を開けたように見える格納庫が避難所でした。床はコンクリートで冷え冷えています。たくさん入ったので、手足を伸ばすこともまま

ならず、お手洗いにでも出かけようなものなら、すぐに自分の場所がなくなってしまう。しかし、雨をしのげるだけでも良いと思いました。

ずっと後に次男から聞いた話ですが、侵攻してきたソ連兵に逆らって殴られ、出血がひどく、輸血をしないと命にかかるといふ人がいて、次男が大きな注射器一本分の血を提供したということでした。

この格納庫での避難生活のなかで、小さな子供たちがハシカやジフテリアにかかって、幼い命を奪われました。私もいよいよ大連に出発するといふ前の日に、末子の四男也が亡くなりました。色白で女の子のようにかわいい子でした。三男も病気で寝ている状態で、駅まで荷物をどうして運んだら良いのか困り果てていましたので、末っ子が亡くなって、内心では「これで助かった」とほっとしました。こんな親がどこにいるだろうか、まるで鬼だと、当時は自分のことを本当にそう思いました。栃木屯の男性が、四男也を行李の蓋に入

れ、小布団を掛けて土に埋めてくれました。

翌日、母の行李を背負い、三男を上に乗せ、大きな風呂敷に塩の入った鍋とオムツを包んで持ち、やっと汽車に乗り込みました。三男を抱いて座りましたが、熱があるので「お水頂戴」と言うのです。しかし、私の水は無くなっていました。お友達が見かねて少し分けて下さった水を、おいしそうに飲んでいました。

汽車が停まるたびにソ連兵が乗り込んできて、略奪が始まりました。私もペンや腕時計は早々に取られてしまいました。大きな風呂敷包みには良い物が入っていると思ったのですが、外へ持って出て開けてみると、塩の入った鍋とオムツだったので、窓から投げ返してきました。ソ連兵にも幾分かの善意があったのかなと思いました。最後に、将校用の革カバンをうっかり車内の壁にかけておき、それを見つけられてしまいました。「ダワイ、ダワイ」と指さすので、カバンに入っていた貯金通帳や証券類を出して投げ与えまし

た。もう、めぼしい物は無くなつてしまいました。た。

汽車が停車している間に、死んだ人を駅に置いてきたり、畑に埋めずに置き去りにしたのを見聞きしました。私の三男も熱が下がらず、水がほしいと言つたびに、なけなしの水を頂いておいしうに飲みながら、ついに亡くなりました。三男の遺骸をどうしようかと思つていたところ、栃木屯の男性から避難先の大連は近いので、大変でしょうが連れて行きなさいと助言があり、三男の遺骸をおんぶしていくことにしました。死んだ人がこんなに重いとは、思いもありませんでした。

大連にやつと着き、避難所の実業学校に入りました。ここで合同慰霊祭が行われ、遺体は防空壕の奥に埋葬されました。私の家の仏様は、二人とも土に埋めて頂き、有り難いことだと感謝の気持ちでいっぱいでした。

大連の避難所では、大連市民の皆様からたくさんのおにぎりや饅頭などを頂き、道中の貧しい食

事と比べて涙が出るほどおいしく食べました。また、布団や毛布などを頂き、大変助かりました。しかし、避難所でのその後の食事はひどいものでした。精白されておらず、赤い皮が付いたままの高梁コリヤンと豆を煮ただけのものでした。最初豆ばかりを拾つて食べていましたが、すぐに高梁だけのご飯になり、たちまちお腹を壊し、便所通いが大変でした。

栃木屯では男性はもちろん、体の丈夫な女性も働きに出ました。残りの女性が留守を守りましたが、食事は高梁だけでした。私は主人が召集されて家を出て行くときに「両親と子供を頼むぞ」と言つていた言葉が頭から離れず、夕食後に皆さんに相談しました。自分の所には年寄りがいるのだが、老人には高梁だけでは体が駄目になつてしまうので、せめてお米と餅、粟混じりのご飯を食べさせてほしいとお願いしたところ、責任者の男性からは、「それは駄目だ」と聞き入れてもらえませんでした。私は、仕方なしに共同から別れ

させてほしいとお願いして、聞き入れてもらいました。

それから、一緒に共同から出た友だちと二人で便所の汲み取り、味噌、醤油などの売り歩きなどをしましたが、そのうちに一人で、朝みんなが寝ているうちに市場に行き、味噌、醤油、食用油などを安く仕入れて売り歩き、手に入ったお金で両親には餅、粟に米の入ったご飯を、私と子供たちは高粱を炊いて食事を済ませました。

次は洗濯婦の仕事でした。洗濯は、朝お風呂を沸かしてからの仕事なので、朝風呂を頂いてから洗濯をします。洗濯をしてアイロンを掛ける仕事で、一日三軒を掛け持ちしました。一軒三十円で九十円頂けました。そのころは一日女中仕事をして、給料は三十円でしたので、それに比べると大稼ぎでした。私も時計屋さんで女中さんを務めたときは、お昼をご馳走になって三十円でした。

また、中国人の女の先生の所で洗濯婦をしたこともあります。このときは一日中洗濯しても五十

円という条件でしたが、私が朝、「お早うございます」と家に入ると、先生はお米と餅、粟の入ったご飯をドンブリに山盛りして、「今の日本の方では食べられないだろう」とすすめてくれました。私はべろりと平らげて、我ながらよくお腹に入ったものだと感じました。帰りには、両親や子供さんに食べさせなさいと言って、またドンブリ山盛りのご飯を、手当の五十円と一緒に持たせてくれました。この仕事は一年二カ月も続きました。

帰国するとき、お世話になったお礼に何うと「良かったね!」と言ってふかふかの饅頭を十二個も下さって、「気を付けてお帰りなさい」と言ってくれました。先生のご主人の所に挨拶に行くとき、「良かったね!」とのことでしたが、「なぜ日本は戦争に負けたのか?」と聞かれました。「不知道(分かりません)」と答えると、ペンを持ってきて「侵略」と書いて、これだからだと言われました。

他に、ソ連軍の将校の家にも、一週間に一日の割合で行きましたが、マダムが良い人でした。マダムには一歳ぐらいの赤ちゃんがいるのに勤めに歩いていましたが、私には赤ちゃんの世話はさせませんでした。兵隊が一人来て、オムツ洗いまでしていました。またある日、ご主人の将校から布団を作ってほしいと頼まれ、別に賃金五十円を頂きました。こんなとき、言葉が分からないのはどうにもどかしいので、日常会話集を買って勉強しましたが、なかなか理解できませんでした。ある日、ご飯の上に青いどろっとした油を掛けて出され、「おいしいから食べろ」と言われましたが食べられず、もつたいなく、また残念でした。またあるとき「肉を買ってこい」と言われ、何の肉かと困っていましたら、お尻に指を曲げて当てたので、豚肉だと分かる始末でした。こんな状態でよく勤まったものだと、我ながら感心しました。私の避難所生活は大体こんなものでした。

長男が発疹チフスにかかり、高熱が出ました

が、体力もあり丈夫な子なので、両親に看病してもらって、私は働きに出ました。長男が治ったと思ったら、今度は次男が同じような病気にかかりました。高熱で体が弱っているようなので、大連病院に入院させました。池田さんと蓮見さんのお子さんも入院して同じ部屋だったので、親たちのうちの一人が交替で看病し、二人は働きに出ました。次男は三日目に意識が戻り、食欲も出てきましたが、熱で膝が侵され、伝い歩きしかできませんでした。それでも一週間ぐらいで、蓮見さんのお子さんと一緒に退院しました。

ほっとする間もなく、今度は主人の大事な義母が発疹チフスにかかり、大連病院に入院しましたが、義父に看病してもらって、私は働きに出ました。朝早く市場に行って仕入れをしてから病院に寄り、二人の食事を作ってから仕事に出かけ、帰りにはまた病院で夕食を整えて避難所へ戻り、自分たちの夕食を作るという毎日でした。夕食後には避難所の部屋を回って、朝仕入れた山芋などを

売り歩きました。値段が安いので、皆さんに喜んで頂き、私も助かりました。

昭和二十年の十月から十一月中に満州国郵便局の貯金通帳で、戦争に関係のない通帳一通について三百円を限度に払い戻しを受けることができるようになりました。そのため、私ども五通分で千五百円が手に入りました。このお金は入院費になつてしまいました。お金の手当は付きましたが、義母の病状は回復せず、十二月三十日に義父と私で、義母の最期を看取ることになりました。

義母は実子が一人もいなかったもので、淋しい思いをしたことと思います。栃木屯の方々のお世話で、避難所の裏山にある見晴らしの良い所に埋葬して頂きました。

病院の支払いなどでお金も無くなってしまい、お正月をどう迎えようかと思索していましたが、洗濯に通っていた家から小さく丸めたお餅や、イリコを頂きましたので、部屋の人たちにも分け、とても良いお正月ができました。

このころから、義父は積み上げた布団に寄りかかって、瞑想にふけるようになってきました。体の具合が特に悪い訳でもありませんのに、誰とも話をせず、そうしているのは、義母の死で気が滅入っているせいだと思えました。私が働かなければどうしようもないので、義父のことは子供二人によく頼んで、市場通いを続けました。気力の弱っていた義父には、お粥を作るなどしましたが、昭和二十一年の四月に、私たち家族と主人の妹の夫に見守られて、亡き義母のもとへと旅立ちました。

このころになると、大連では埋葬許可証が必要になっていましたが、市役所に二、三日通つてやつと交付されました。義父の埋葬場所は、避難所から二山離れた中国人墓地の片隅でしたが、日当たりの良い場所でしたから、寒がりだった義父にとっては良い場所だと、ほっとする思いでした。帰りには、皆さんと一緒に避難所の裏山の義母の墓に詣で、報告しました。山の尾根からは、遠くの間が見える眺めの良い所でしたが、兵器の

残骸などが散らばっていました。避難所に帰って、お世話になった皆様にお礼を申し上げ、悲しい一日が暮れました。長男は同じ年頃の友達と石けんを仕入れてきて、街で売り始めました。同情もあつてか、よく買って下さったようでした。

昭和二十一年の暮れも近いころ、内地に引揚げができるという噂が伝わってきました。私がお世話になっていた仕事先に挨拶に行きました。仕事先の人たちはみんな親切で、饞別や品物をたくさん下さいました。それで、食べ物や着物を買うことができました。子供たちにも革靴、セルの洋服、満鉄の帽子や大人用のリュックサックを買いました。リュックサックには子供の物を入れました。私は帯芯二本でリュックサックを作り、荷物と小布団を入れました。

内地に持つて行けるお金は、一人千円までという制限がありました。一人千円の枠を超えるお金を持つている人は、お金のない人に、内地に帰ってから半分返せばよいという約束で貸しました。

私は栃木屯の人で、街で卸業をして大金を持つている人から、同じような条件で三千円をお借りしました。義弟にも頼まれて紹介しましたが、主人の妹は亡くなっていましたので、内地に帰ってからお金は私が返済して、義弟とは縁を切ろうと決心しました。

ソ連の将校宅へ帰国の挨拶に行き、避難所に帰ってみると、みんな忙しく埠頭に行く用意をしていました。子供たちはどうして良いか分からず、おろおろしていましたが、私は前もって支度していたので、炊事道具をしまうだけでした。貴金属の持ち出しが認められず、乗船時の税関検査で没収されると、他の人にも迷惑が掛かるから持たないようにと指示があり、大事にしていた満州国建国十周年記念の銀杯を持ち帰れなかったことは、返す返すも残念なことでした。

ソ連軍のトラックで避難所を出て、埠頭に向かいました。みんなラバウル小唄の替え歌で「さらば大連よ……」と合唱していました。埠頭に着い

てすぐにも船に乗れるかと思っていました。引揚船はなかなか来ませんでした。持って来た黒パンは、日が経つと酸味が増えてカビが生え、中国人が食べていたウジ虫入りの味噌のような味になりましたので、私がカビを取りながら食べて、子供たちには白パンを食べさせるようにしました。埠頭から外には出られませんでしたが、しかし、しばらくしてソ連軍がパンと肉入りのスープを配給することでしたが、パンは小さく、スープとは違うものの、肉の実など何も入っていない汁が、湯呑み茶碗に八分目ぐらいだけでした。

やっと日本の国旗を掲げた二隻の船が見え始め、棧橋に横付けされ、何の検査もされずに乗船しました。出発したのは夕闇が迫る頃でした。弥栄の家を出るときは七人でしたのに、今は両親と子供を亡くして三人での帰国で、淋しさと申し訳なさに涙がにじんできました。しかし一方、帰国の喜びもあつて感慨無量でした。

しばらくして出された夕食は私の嫌いな麦ばかりのご飯でしたが、炊いたばかりのものは、さすがにおいしく頂きました。船が小さく、海が荒れていたのも、他の一隻は佐世保に直行し、私たちの船は朝鮮半島を回っていくことでした。それでも船の揺れで食事も取れず、桶を抱えて寝ている人、ときどき起きては便所に行き、また寝てしまう人がほとんどでした。私と長男も船の揺れが駄目な方で、次男だけが甲板に出て遊んでいたようです。次男は、鯨が船を追いかけているとか、波頭が大きくて、船が波の谷間に入ったときにはマストより高かったとか、波の背に乗ったときには、まるで山の尾根を走っているようだったなどと、外の様子を話していました。

また、水葬の様子を見ていたのか、死んだ人が白い布で全身を巻かれて戸板に乗せられたが、その上に日本の国旗が掛けられていた。そして合図があつて、遺体だけが足から海に落とされ、船は汽笛を鳴らしながらその回りを一周してその場を

離れたと、詳しく水葬の有様を息せいで話したところ、周りの人が「三周するのが本当だが、海の荒れ方がひどいので、はしょつたらしい」と言っていたなどと、いろいろ興味をもつて話してくれました。

出航して三日目に、待ちあぐねていた日本本土の陸地が見えてきました。そのころには海の荒れも、ようやく収まってきましたので、私も長男も、次男に誘われて上甲板に上がっていました。懐かしい故国日本、父母兄弟のいる故郷を飽くことなく眺めていました。

ようやく、三人でも日本にたどり着くことができたのは、主人が召集された後に男手がなくなり、飼育することが困難となったために売った子牛七頭のお金を組合に預けていたのが、敗戦の直前、一家全員で千振村にいる私の従姉の家に遊びに行くために、全額引き出して持っていた事。それから、次男の誕生間もなく使用人の独身中国人が発疹チフスにかかり、私が看護していました

が、それがもとで私もチフスになり、生死の境をさまようような重症になったおかげで免疫ができて、避難行中に大きな病気をしなかった事。そしてなんといつても、引揚げの途中において、様々な方たちからの物心両面での有り難い協力、援助などを頂き、幸運に恵まれていたからなのです。だんだんと近付いてくる陸地を眺めながら、走馬灯の如く浮かんで消え、消えては浮かんでくる出来事を思い起こし、放心状態になっていました。

上陸後、まっすぐに栃木の実家に向かいました。

その後、主人も兵役解除となり、無事に復員して、私の実家で農業を手伝いながら、身心ともに静養した後に、同じ栃木県的那須で第二の開墾の鉤を入れました。

長男は、小学校六年生のときに付近の川に水遊びに行き、事故で亡くなりました。かわいそうなことをしたと、今でも悔やんでおります。

今は、次男一家の世話になって、静かに老境を過ごしています。

思い起こせば、弥栄村では村長さんをはじめ、幹部の方々がしっかりとっておられて、よくまとまって村民を指導して頂き、避難行でも、より安全な地域に引率、移動させて頂いたおかげで、他の多くの開拓団のような残留孤児を出すこともなく、危険な目に遭うことも少なく、心から感謝しています。

もちろん、日本へ引き揚げる間に、多数の尊い犠牲者が出ました。しかし、それは食糧事情と衛生事情によるもので致し方のないことと思われませんが、それにしても申し訳ない気持ちでいっぱいです。

ハルビンからの引揚げ

埼玉県 鷹 澤 三枝子

私の父、上谷正道は明治三十三（一九〇〇）年に京都府の丹後町に生まれましたが、大正八（一九一九）年神戸の神港商業学校を卒業するとすぐに、当時いとこの相見幸八が経営していたハルビンの高岡号（株）に、資金二千元を持って共同経営者として入社しました。大正五年に神戸高商を卒業した父の長兄、すなわち私にとっては伯父になる人が、翌年に朝鮮の京城（ソウル）で腸チフスで亡くなっていたので、その代わりということでもあったようです。

明治三十八年に日露戦争が終わり、明治四十年には長崎、ウラジオストク間に定期航路が開かれ、高岡号（株）はウラジオストクで日露貿易の事業を進めていました。大正六年に、当時のロシア